

## 中国東方地方侵略

### 1) 第一次世界大戦と日本 復習

- ①戦場となったヨーロッパ諸国にかわって、アジア市場に進出、空前の大戦景気に沸いた。
- ②1915年1月、袁世凱（えんせいがい）政権に対して二十一か条の要求を行い、そのほとんどを認めさせた。
- ③日本国内では、進歩的知識人や労働者の台頭で大正デモクラシーが開花した。
- ④1919年3月1日、日本統治下の朝鮮では三・一独立運動起きる。

### 2) 第一次世界大戦後の日本

第一次世界大戦後の不況から脱出できないまま、1927年に金融恐慌、続いて1929年の【1: 大恐慌】の影響は1930年以降本格的に日本を襲った。小作争議、労働争議は頻発し、社会不安は増大した。1931年の大冷害による凶作等により更に深刻化。※1 腐敗した既成政党は政争を続けて国民の信頼を失い、軍部は中国東北地方への支配圏拡大で問題解決ができると信じた。

### 3) 中国東方地方侵略の序章は1928年の「満州某重大事件」 張作霖を爆殺した事件である。 No.178参照

中国側の仕業に見せかけるため、その車両には何も知らない関東軍の将校も乗り合わせ、一緒に死亡するはずだったが、彼は奇跡的に軽傷で助かり、戦後、彼の娘が、味方の生命さえ何とも思わぬ当時の軍部のやりかたを憤る発言をしている。

### 4) ついに決定的な事件が起きた。1931年9月18日の【2: 九一八事変】である。

日本の陸軍部隊、関東軍が、奉天郊外柳条湖で南満州鉄道の線路上で自分で爆薬を爆発させ、これを中国軍のしわざだとして、線路に被害はほとんどなかったのに、爆発音を合図に近くの中国軍兵営を攻撃したという事件。関東軍は張学良の軍の仕業だとしてただちに軍事行動を展開し、これをきっかけに起こった戦争を当時日本側では「【3: 九一八事変】と呼んだ（当時、日本では中国東北地方を「満州」と呼んでいた）。宣戦布告がないが、戦争である。「十五年戦争」と呼ぶ場合、ここ（1931）から起算している。共産党との内戦を優先した蒋介石は不抵抗方針をとったため、関東軍はわずか5か月で中国東方地方一帯を占領した。

### 5) 軍部は国際社会の注意をそらすために、1932年1月～5月、上海でも中国軍との衝突を仕組む。これを当時日本側では「上海事変」と呼んだ。日本人殺害事件を口実に日本海軍が戦闘を開始。日本軍はかなり苦戦したが3月に停戦。英米仏伊の調停を得て停戦協定の成立をみた。

### 6) 1932年3月1日、日本は「【4: 満州国】」を建国させた。首都は長春、これを新京と改名。清朝の廢帝 溥儀 ふぎを迎える。1932年には執政、1934年には皇帝となる。→ 映画「ラストエンペラー」ワシントン体制は、これをもって崩壊したとされる。

### 7) 1932年、中国の提訴で国際連盟は【5: 李頓報告】の派遣を決定。【5】は軍事行動が自衛権の発動であるとする日本の主張を退け、国際連盟もこれを支持した。これに基づいて、1933年、国際連盟は「満州国」の不承認を決議した。日本は国際連盟を脱退した。

### 8) 1932年5月15日の【6: 五三〇事件】はクーデター未遂事件である。「話せばわかる」と呼びかける犬養首相を「問答無用」と拳銃で殺害。犬養内閣は最後の政党内閣となった。これをもって政党政治の崩壊と見なすのが一般的。

※1 宮沢賢治の有名な「雨ニモマケズ」の詩は、1931. 11. 3の執筆と推定されている。「サムサノナツハオロオロアルキ」とは同年の大冷害のことだろう。「西ニツカレタ母アレバ」は人々の疲弊を、「北ニケンクワヤソショウガアレバ」は小作争議・労働争議を暗示しているのだろう。

## 華北侵略と二・二六事件

### 1) 1933年、国際連盟を脱退した日本は華北にも兵を進め、熱河方面にもおよび、一時は長城を越えて北京に迫った。これと同時期に軍部の一部は五・一五事件（前掲）や二・二六事件（後掲）を起こし、影響力拡大を図った。

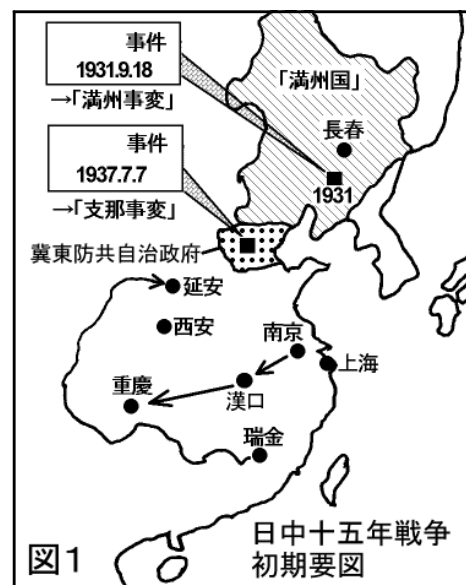
### 2) しかし、蒋介石率いる南京の国民政府（国民党）は、日本への即時抗戦よりも、国防力の強化と中国共産党の鎮圧（＝【7: 寧漢分裂】）を優先した。中国共産党が1931年以来中華ソヴェト共和国臨時政府を置いていた江西省瑞金を包圍し何度も攻撃を加え、1934年、瑞金（中華ソヴェト共和国臨時政府所在地）を占領した。このため、中国共産党軍は、1.25万キロの逃避行を行った。これは後世、【8: 長征】（あるいは大西遷）と呼ばれる。中国共産党は1935年、ようやく陝西省延安を新根拠地にした。この間に【9: 西安事変】の主導権が確立した。図1参照。

### 3) 1935年8月1日、コミンテルンの指示を受けた中国共産党は、【10: 瓦窑堡会議】を發し、内戦停止・【11: 抗日民族統一戦線】の結成を呼びかけた。

### 4) 1935年、国民政府は、世界恐慌の影響による経済の混乱を終息させるため、全国統一の通貨（法幣）制度を設けた。銀の流通を禁じ、政府系銀行の発行する紙幣（法幣）に統一した。これは地方軍閥の力を弱めた。

### 5) 日本軍は内モンゴルから華北に侵攻し、1935年、河北省に冀東防共自治政府きとうぼうきょうじちせいふ という政権が成立した。当時の日本側の認識によると、地方自治を求める民衆を背景に殷汝耕の指導により成立したとされるが、中国側からは日本側の特務機関の工作活動により設立された傀儡政権であると主張されている。この政府は1938年に交渉によって平和裏に中華民国に合流した。図1参照。

### 6) 1936年12月12日には、【12: 西安事変】が起きた。蒋介石は延安を攻撃するよう張学良らに促すために西安に赴いた。この



時を逃さず、張学良らは蒋介石を監禁して、抗日への政策転換を求めた。中国共産党の【13: 】しゅうおんらい 1898-1976 も秘密裏に訪れて、説得は成功したとされている。これは、1937年9月22日の第二次国共合作の成立による抗日民族統一戦線の結成に結実した。「合作」は切迫した状況下での一時的、局地的なものだったとする説もある。

- 7) わが国では1936年2月26日、【14: 】が勃発した。これは陸軍皇道派将校が兵1400 ※2 を率いて決起した大規模なクーデター未遂事件である。閣僚・重臣を暗殺、首都中心部を4日間占拠したが失敗。首謀者たちは迅速に処刑されたが、影響は甚大。5月には軍部大臣現役武官制が復活した。この事件によって軍部の政治支配が決定的となったとされている！

わが国の場合は、ムッソリーニやヒトラーのような「超人的」指導者が政権を掌握するという過程が無いため、ハッキリとは見えにくい。1936年以降、どんなに有力な政治家も軍部には抗しえないことが歴然としたため、1936年をもって、日本のファシズム化は完成したと見なされている。それは、「軍部ファシズム」と呼ばれる場合もある。

※2 若き日の「柳家子さん」師匠（噺家、2002年死去、人間国宝）もこの1400の兵の1員だった。

《蛇足》このころ、国内では不可思議な心中事件が相次いだ。1932年、「坂田山心中」は良家の息子（慶応大生）と名門の娘の許されぬ恋が不幸にも心中という結論に達した。女性の遺体が盗まれ大事件に発展し、「天国に結ぶ恋」という映画までできた。これ以来20組もが各地で次々と心中。1935年までの心中（未遂含む）は100組にも及んだ。三原山火口に飛び込むカップルもあいついで、有毒ガスの中を出動せざるをえない地元警察、消防団を悩ませた。一般に心中や自殺の増加は、その社会の不健全さ、危険性を反映しているという説もある。

時期的にこれらよりやや早い。1927年に芥川龍之介が自殺している。動機は、「僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安」とだけ書き記されている。それが単に文学創作上の深刻な悩みを意味するのか、あるいは1925年の治安維持法制定以来、急速に自由度を失い、自由な創作ができなくなる不安を繊細な作家の心が早くも察知していたのか、今となっては分からない。彼は台頭するプロレタリア文学の陣営から「ブルジョワ文学」と批判されていた。宮本賢治（2007年没 宮沢賢治ではないぞ！）が20才の時に、芥川文学を「敗北の文学」と酷評したのは、芥川死後の1929年のことだった。なお芥川の息子たちは皆優秀で音楽家、俳優などになっている。

## 日中戦争と民族統一戦線

1937年7月7日以降を日中戦争と呼ぶことが多い。

- 1) 1937年7月7日、北京郊外で【15: 】起きる。これが日中（全面）戦争のきっかけ！！  
快晴の七夕の夜、満天の星空の下、夜間演習中の日本陸軍部隊に向けて一発の銃弾が発射された。銃弾は兵士たちの頭上を飛びすぎて行った。非常点呼の結果、兵士1人が行方不明だった（その兵士の無事は後刻判明した）。現地日本軍は、これを中国軍の敵対行動とみなし、華北で全面的な軍事行動に出た。これを、日本側は「支那事変」と呼んだ。宣戦布告は行われなかったが、戦争とみなされる行為である。

- 2) 日本は華北、華中の主要都市を次々と占領した。日本は上海を陥落させれば抵抗はやむだろうと考えていた。ところが、上海を占領（1937年8月13日）しても抵抗はやむどころかいつそう強くなった。図2参照。

- 3) 1937年9月22日、国民党は【16: 】を宣言、【17: 】が成立！日中両国は全面的交戦状態に入った。

- 4) 1937年末までに、日本は華北の要地と首都【18: 】を占領した。1937年12月、日本陸軍が南京を占領したが、この占領の前後の計3カ月にわたって行われたとされるのが、いわゆる【19: 】であり、国際的非難を浴びた。図2参照。

- 5) 1937年12月13日、南京を攻略された国民党は首都を武漢（厳密には漢口）を経て1938年、【20: 】（四川省）に移動して戦い続けた。国民政府は、仏領インドシナや英領ビルマを通る陸路（援蒋ルート）を通じて英米仏ソの援助を受けた。奥地で鉱工業を発達させた。図1・図2参照

- 6) 日本陸軍航空隊、海軍航空隊は1938.12.4～1943.8.23の間に、断続的に計218回重慶を爆撃した（特に1940年は大規模だった）。初期は精密爆撃、末期は無差別爆撃である。ちなみにドイツ空軍によるゲルニカ爆撃は1937.4.26なので、重慶空爆は人類史上二番目の都市空爆であり、しかもゲルニカとは異なり6年にも及ぶ計画的戦略的都市空爆である。

重慶の市街地は、甚大な被害を出し、国民政府に大打撃を与えたが、戦果の大きさを充分認識していなかった日本軍は、「南方転進」によって空爆を中止した。また、故にエンジン4機搭載の本格的戦略爆撃機を製造しようとせず、護衛用に爆撃機並に航続距離の長い戦闘機（後の「月光」でありゼロ戦ではない）を作ったのみだった。重慶に派遣されていたアメリカの軍事顧問の一人は、炎上する重慶の街を見ながら「今に見ておれ、東京も同じようにしてやる」と呟いたという。東京大空襲などわが国に対する本土都市空爆、原爆攻撃などに、重慶空爆の報復として正当化の口実を与えた面もあるという指摘もある。

- 7) 1938年11月、近衛文麿内閣は東亜新秩序 ※3 建設を掲げ、「……国民政府を相手とせず……」という【21: 】を發した。これは蒋介石政権を否定するものであり、1940年には、重慶政府に対抗して、南京に【22: 】おうちょうめい 1883-1944 の傀儡政権を作らせるが、これは実態をまったく伴わないものだった。

※3 「大東亜共栄圏」は1941年12月の太平洋戦争勃発以降、近衛文麿内閣が目標として掲げた。

- 8) 1938年7月～8月、①張鼓峰事件、翌1939年5月～9月、②【23: 】起きる。両事件はともに「満州国」とソ連（①）、モンゴル人民共和国（②）との国境地帯における実力行使（②では国境警備隊の小規模な戦闘）が、日本陸軍とソビエト連邦軍主力どうしの全面衝突に発展した。国境紛争として処理されたが、実態は戦争であり、①では戦死者525名を出して辛勝したが、②では戦死者8440名を出して完敗し押し戻された。②によって、日本はいわゆる南進論に転じた。

- 9) 1940年、日独伊三国軍事同盟を締結。1941年には日ソ中立条約を締結した。

